

# がんサバイバーシップを先導する 看護実践開発研究



慶應義塾大学 看護医療学部 学部長/教授

小松 浩子

## 研究の背景

がん治療の画期的な進歩により命が救われ、社会の中で生活しながらがんの治療やフォローアップを受ける「がんサバイバー」が増加しています。医療者はこれまで、がん治療の効果や副作用対策に力を注いできました。今、がんとともによりよく生きるために、がんサバイバーの当事者の視点から心身の安寧、仕事と治療の両立や継続など「ポテンシャルインポートヘルス」に着目したケアの重要性が叫ばれるようになってきました。

がんサバイバーの潜在性を引き出すには、がんとともに生きる中で生まれる当事者の知恵や価値を丁寧に掘り起こし、理論へと紡いでいく質的研究法が必須です。私たちの探求はそこから始まりました。そして、当事者の本音や真のニーズを含む中範囲理論生成から実際の療養や生活に役立つケアをつくり、実用化につなげるという実践開発研究を進めてきました。

## 研究の成果

実践開発研究は、個別のケアからグループ、システムへと対象を拡張しながら進めています。例えば、がんサバイバーの内なる力を当事者間で引き出す相互作用モデルを考案し、セルフヘルプグループとして実用化を図るとともに、うつや不安、QOLの改善に対する効果を検

証しています(図1セルフケアKit)。また、がん患者が主人公として納得のいく治療を継続できるケアシステムの開発にも着手しました。研究を積み重ねる中で、がんサバイバーの潜在性を引き出すには、当事者の心の声に耳を傾け、対等な関係で互いに鼓舞しあえる「がんコミュニケーション」がケアの要であることがわかり理論化に至っています。そして、がんの脅威やがんに対するスティグマ(負のレッテル)から孤立し、仕事復帰をあきらめてしまうことのないよう、「がんコミュニケーション」を導くピアサポート(当事者同士の相互支援)育成の遠隔学習システム開発へと実用化を進めてきました(図2)。

最近では、がんサバイバーの安全と安心を脅かす、オンコロジーエマージェンシー(緊急時の対応)に着目し、経口抗がん剤の過剰服用や中断の背景にある、心的葛藤を探求し、生活経験や価値・意向を重視したセルフケア形成、およびリスクと安全、効率性を念頭に置いたケアシステムの構築と検証に取り組んでいます。

## 今後の展望

がんサバイバーの潜在性が発揮されることが、社会や経済にどのような波及効果があるかを探求する必要があります。また、がんサバイバーを長期間にわたり悩ませ続ける神経系合併症に焦点をあて、身体、感情、社会的文脈における安全ネットの形成が職場復帰や離職防止にどのように効果を生むか、医療経済学的視点からも探求を進めたいと思っています。

セルフケアプログラムKit

- ◆ **がんデイケアKIT**
  - ・患者用パンフレット2冊、
  - ・家族用パンフレット1冊、
  - ・セルフケアノート、
  - ・リラクゼーションテープ、
  - ・乳房自己検診シート、
- ◆ **CAI**
- ◆ **ビデオ**(不安を抱えているのはあなただけではない2巻)



図1 セルフケアKit



図2 がんコミュニティサイト：ピアサポート育成の遠隔学習システム

## 関連する科研費

平成11-14年度 基盤研究(A)「がんデイケアモデル開発のための実証的研究」

平成15-18年度 基盤研究(A)「日本型がん集学的アプローチのためのケア提供システムモデル開発と評価」

平成19-22年度 基盤研究(A)「患者と医療者が分かり合えるがんコミュニケーション促進モデルの開発と有用性検証」

平成23-27年度 基盤研究(A)「外来化学療法におけるオンコロジーエマージェンシーの安全ケア質保証統合システム開発」

平成25-27年度 挑戦的萌芽研究「若年女性がん患者の妊孕性温存に関する意思決定支援統合ケアモデルの開発」